

ベストセラー小説「日本沈没」で

世界に衝撃を与える一方、博覧会の総合プロデューサーとして手腕を発揮した小松左京さん。該博な知識を正確に駆使する才能は「小松コンピュータ」の異名でよく語られた。

旧制中学時代は、俳優の高島忠夫さんらと軽音楽バンドを結成するかたわら、校内の文芸誌にユーモア小説を寄稿し、演劇部も作った。そして京大進学後、同人誌に参加し才能の芽がふきだした。

京大卒業後、やがて漫画の台本を書くようになるが、生活は食費にも事欠く貧苦の状態が続いた。妻の

2011.7/29

多才な「コンピューター」

嫁入り道具だったラジオも質屋行きに。娯楽がなくなった新妻に読ませるために毎日、原稿用紙に少しづつ書いてはちゃぶ台に置いて出勤したのが「日本アパッチ族」になった。

SF作家として売れっ子になった小松さんは八面六臂(ろっぴ)の活躍をする。宇宙科学から国際政治まで好奇心旺盛で、頭の回転の速さは誰もが驚かされた。有人宇宙船、スペースシャトルが初めて宇宙の旅をした1981年4月のこと。地球に生還する様子を伝えるテレビ中継を小松さんの事務所とともに見た。科学技術と背景の国際政治を軽妙に解説していただ

き、心配りのこまやかさにも感激した思い出がある。阪神大震災の被災実態をもとに毎日新聞で連載「小松左京の大震災95」を始める時、興奮まじりに「この現実をしっかりと受け止めた」と語っていた。

大阪では大阪弁を、東京では共通語を使いこなし、サービスピ精神は旺盛だった。SF界の大御所といわれ、デビュー作は直木賞候補になった。その本質は文学の人だった。多彩な才能をフルに発揮した小松さんが思い残したことは何だろうか。大酒を飲み、たばこを次々とふかす姿が懐かしい。【元毎日新聞論説委員、池田知隆】